



企業顧問・通訳・ライター
南 治子

This is My Guilty Pleasure!

私の楽しみ⑥

もうひとりの自分と向き合う短歌

詩(うた)を詠むきっかけ

10年続けた勤めを辞めて独立し、さあこれからという時、いきなり大病を患い入院する羽目になった。自ら雇用のセーフティネットを外した末の現実を受け入れられず、痛みにも耐えられず、毎日ベッドの上で泣きじやくって眠りにつく日々であった。無機質な病室から眺める窓の外には、真つ白な雲を浮かべた青空と、見慣れた大阪城があった。太閤さんが天下取った場所なんやなあ・・・と改めて目にはしている、何だか悔しさが込み上げてきた。

私も天下取りたい。
そういえば正岡子規は病床に

私的な心の叫びが全国紙に

あつて俳句を詠んでいた。寝転んだまま読んでいた新聞には一般公募の俳壇・歌壇欄がある。かつて諦めた文学の夢をもう一度追ってみよう。実社会で役に立たないと散々言われてきた文学部卒のプライドがふつふつと湧き上がった。詩のルールすらわからず、その時の壊れそうな想いをただただ我流で俳句と短歌に書きなぐって投函したところ、ビギナーズラックでいきなり朝日歌壇に入選した。

抽出を薦めし医者はわからない
私の裸身のうつくしきこと

(南 はるか)



私的な心の叫びが全国紙に

初の一席入選

しかし人生はなかなか思い通りにいかない。退院後、今度はリーマンショックに見舞われ、企業の外注が激減し、自称フリーランスの開店休業状態に陥った。よく、可処分所得の減少に比例して教養娯楽関係費も減ると言われるが、私は違ふと思う。失意のどん底にいる時こそ、人は夢を見なくなるものがある。現実から逃避するために大阪・難波の映画館に行き、帰りに道頓堀の今井できつねうどんを食べた。

おうどんのおつゆが飛んでお茶に入る瞬間見つめるおうどん

(南 はるか)

日経歌壇、初の一席入選。選者の穂村弘先生より「奇妙な臨場感に惹かれる。だから何というここのない一瞬、しかし、その連続が生の本質かもしれない。」とのご講評を賜った。絶望の真つただ中、新聞紙面で小さな天下を取った。



新聞を縦折りにして読む人と人の間を景色は流れ

(朝日歌壇 一席入選)

お気づきだろうか、全て通勤電車にまつわる内容であり、しかも会社員を辞めた後に過去を懐かしがって詠んでいる詩である。当時、満員電車で揺られて無機質なビルに向かう毎日が嫌で嫌で仕方がなかった。ある朝、電車がカーブを曲がる瞬間にハイヒールで足を踏まれ、痛みと悲しきとめどなく涙があふれ

(日経歌壇 入選)

今思い起こせば、この時の心理状態は尋常ではない。普段の食事中に、おつゆが飛んでゆく先なんていちいち見えていない。なぜそんなディテールを自分で追っていたのか、自分でもよくわからない。心の中が鬱々と淀んでいたので、こぼれ出した風景なのだろう。忙しい生活を送っていたらバカバカしく相手をしていられないことも、短歌では「ナシセンス」という枠組みで最高のネタになる。

その後、景気が回復するにつれて、拙作も変遷していった。

作風の変遷

その後、景気が回復するにつれて、拙作も変遷していった。



俳句の違い

団塊世代の大量退職が始まった2000年代後半より、日本の俳句人口は1000万人に及ぶと言われる。俳句は五・七・五の十七文字であり、必ず季語を伴う。室町時代に盛んであった「連歌」から派生した「俳諧」が江戸時代に確立され、その原型となつていくため、意外と歴史は浅い。世界一短い定型詩というのも、手軽な印象を与え、HAIKUの人気を後押ししているのだろう。

ただ、私には難しかった。季節一つ選ぶにも、旧暦や二十四節氣に則した季節を本当に理解していなければ、いかにも作った感があふれてしまう。そして、たった十七文字に集約した上で行間を読み取り、省略の余韻を残すには、言い訳がまだまだ足りな



一方、短歌の起源となる「紀歌謡」は、「古事記」や「日本書紀」にまでさかのぼり、その後「和歌」として長く親しまれてきた。短歌と呼ばれるようになったのは明治時代以降のことである。

短歌は季語を必要とせず、上句の五・七・五で情景を、下句の七・七で抒情を表す。この下句でいわば作者の個人的な心理状態を自由に描けるわけで、例えば前出の拙歌では、「抽出を薦めし医者はわからない」の上句で、患者の心の内を理解することなく医学的見地から医者が述べた事実を記し、「私の裸身のうつくしきこと」の下句で、なぜ傷一つない白き肌手術痕を残して生き続けねばならないのか、という拙者の内なる悲痛な叫びが表現されている。下句で解き放たれる心の風景が、短歌にはまったきつかけと言つても過言ではない。



閉塞感に包まれた社会を歩いてゆく中で、立ち止まらざるを得ないからこそ見える心の風景を、皆さんも詩に綴ってみてはいかがであろうか。もうひとりの自分に出会えるかもしれない未知の可能性を、心のうちにそつと秘めながら。



南 治子
MINAMI, Haruko

関西学院大学文学部フランス文学科卒業後、ベルギー王国総領事館を経て独立。複数の企業顧問・コンサルに従事。現在、Dayton Therapeutics AG Japan Representative、MPS (株) 顧問、西宮市審議会委員、中央省庁登録通訳、デジタルマーケティングライター。敬愛する作家は谷崎潤一郎、向田邦子。尊敬する経営者は小林一三翁、松下幸之助翁。